

文字史料から見るリヨン司教座聖堂区画の生成

多 田 哲

はじめに

キリスト教会がヨーロッパ都市に与えた物質的刻印の最たるものは、大聖堂であろう。近代に至るまで、司教座聖堂が都市内で最大の建造物であることが多く、近代以降もランドマークとしての機能は維持された。こうした事情から、大聖堂たる司教座聖堂は、歴史学、文学、建築史、美術史などの分野から、特別の注視を受けてきた。しかし、司教座聖堂は単独で機能していたわけではなく、かなり早い時期から付随する建物を有していた。これらは研究者により司教座聖堂建物群と呼ばれている¹。また、司教座建物群が存在する地域は、司教座聖堂区画と称されている²。司教座聖堂建物群ないし司教座聖堂区画に注目が集まった契機として、A・エルランド＝ブランダンブルグの『司教座聖堂』（1989年）およびE・エスキュ『司教座聖堂区画』（1998年）を挙げておきたい。彼らは司教座聖堂から司教座聖堂区画に研究的視野を広げ、司教座聖堂建物群の個々の機能、司教座聖堂区画に住む人びとの暮らしぶり、そして司教座聖堂区画の都市における意義を論じた。また司教座聖堂区画の生成期に限定すれば、『起源から8世紀におけるガリア都市のキリスト教的地誌』が1986年から出版がはじまった。これはガリアの司教座聖堂区画の生成を都市別に追っていった全集であり、2014年に完結した³。

1 Jean Hubert, 'Evolution de la topographie et de l'aspect des villes de la Gaule du V^e au X^e siècle', in *La città nell'alto medioevo, 10-16 aprile 1958*, Settimane di studio del Centro italiano di studi sull'alto medioevo, 6 (Spoleto: Presso la sede del Centro, 1959), pp. 529-58 (p. 545): 'groupe cathedral'; Alain Erlande-Brandenburg, *La cathédrale* ([Paris]: Fayard, 1989), pp. 54-55: 'groupe épiscopal', 'ensemble cathédral', 'complexe cathédral'; Yves Esquieu, *Quartier cathédral: Une cité dans la ville*, Patrimoine vivant (Paris: Rempart, 1998), p. 16: 'groupe cathédral'; Jean-François Reynaud, *Lugdunum christianum: Lyon du IV^e au VIII^e s.: Topographie, nécropoles et édifices religieux*, Documents d'Archéologie française, 69 (Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme, 1998), p. 43: 'groupe épiscopal'.

2 Esquieu, title: 'Quartier cathédral'; p. 40: 'quartier de la cathédrale'.

3 註1で言及したエルランド＝ブランダンブルグ、エスキュの研究文献および *Topographie chrétienne*

都市史において、とくに中世都市の黎明期に司教座聖堂区画が果たした役割は看過できない。たとえば4世紀末から5世紀初頭のジュネーヴでは、司教座聖堂区画が都市面積の4分の1以上を占めていた。またリエージュは、司教座聖堂区画の成立（7世紀後半～8世紀初頭）が都市の発展に先行した例と考えることができるだろう⁴。このような観点から、本稿は古代末期から初期中世におけるリヨンに注目する。古代盛期において、リヨンの都市的中心はフルヴィエールの丘にあった。現在でも大小2つの劇場や水道橋の遺跡が残っており、ここがローマ時代の中心地であったことを容易に想像させる⁵。しかし初期中世に至りリヨンの中心核は低地に移動した。中心核は2か所認められ、フルヴィエールの丘とソヌ川の間、現在はリヨン旧市街と呼ばれている地区、ソヌ川とローヌ川の間で合流地点に近い、現在はプレスキルと呼ばれている地区であ



フルヴィエールの丘から見たリヨン司教座聖堂区画。中央がサン＝ジャン＝バティスト司教座聖堂。写真左方向が北。2017年筆者撮影。

des cités de la Gaule des origines au milieu du VIII^e siècle, ed. by Nancy Gauthier and others, 16 vols (Paris: De Boccard, 1986–2014).

- 4 多田哲『ヨーロッパ中世の民衆教化と聖人崇敬—カロリング時代のオルレアンとリエージュ—』（創文社、2014年）79–81、169頁；Erlande-Brandenburg, pp. 52–54.
- 5 Hugues Savay-Guerraz, *The Lyon Gallo-Roman Museum* (Milan: Silvana, 2017).

る⁶。司教座聖堂区画はこのうち前者に位置し、都市の中心核移動となんらかの関係があったと推測される。

リヨン司教座聖堂区画の生成が、リヨン都市史にいかなる寄与をしたのか。本稿はこの点を論ずるための予備的研究である。古代末期から初期中世にかけて、司教座聖堂建物群に属する個々の建物の成立のクロノロジーを、先行研究によりながら確立する。クロノロジーの確立には、文字史料と考古資料の双方が必要となってくるが、本稿ではもっぱら文字史料に依拠する。考古資料については稿を改めて検討したい。

第1章 サン＝ジャン＝バティスト司教座聖堂

司教座聖堂は通常、都市内で最古の聖堂であり、その創建時には都市唯一の聖堂であった。したがってほかの聖堂と区別する必要はなく、通常は「聖堂」(ecclesia)としか記されない。リヨンにおける聖堂の初出は、シドニウス・アポリナリスが469年あるいは470年初頭にヘスペリウスなる友人に宛てた書簡である。この書簡でシドニウスは、「最近、リヨンの聖堂が建てられている。司教パティエントゥス〔在位451年ころ～491年ころ〕の熱意の賜物で、企てられた計画の頂点が近づいている」と述べ、リヨン司教による聖堂建設を報告している⁷。そしてシドニウスは、この書簡中で聖堂を讃える詩をしたためている。ここに聖堂の場所を示唆する文言がある。「こちらで丘がこだまし、あちらでソーヌ川が反響する。そちらでは、歩行者、騎士、ギシギシいう馬車の御者が、角を曲がっている」⁸。つまり、聖堂は丘の麓でソーヌ川に近く、道路に面している。この条件は、現在のサン＝ジャン＝バティスト(洗礼者聖ヨハネ)司教座聖堂の位置に適合している。

研究者の間では、シドニウスが描写した聖堂は当時の司教座聖堂であったという見解で一致し

6 Arthur Kleinclausz, *Lyon des origines à nos jours: La formation de la cité* (Lyon: Masson, 1925; repr. Marseille: Laffitte Reprints, 1980), pp. 95–104; Paul-Albert Février and others, 'Lyon', in *Topographie chrétienne*, iv: *Province ecclésiastique de Lyon (Lugdunensis prima)* (1986), pp. 15–35 (p. 21); André Pelletier, *Lugdunum, Lyon*, Galliae Civitates (Lyon: Presses Universitaires de Lyon, 1999), pp. 129–35.

7 *Sidoine Apollinaire*, ed. and trans. by André Loyen, Collection des universités de France (Paris: Belles Lettres, 2003–08), II: *Correspondance, livres I–V*, 2nd edn (2003), liber 2, no. 10, pp. 68–71 (p. 69): 'Ecclesia nuper exstructa Lugduni est, quae studio papae Patientis summum coepti operis accessit'. この書簡には MGH 版もある (Gaius Sollius Apollinaris Sidonius, *Epistulae*, in *MGH Auct. ant.*, 15 vols (Berlin: Weidmann, 1877–1919), VIII: *Gai Sollii Apollinaris Sidonii Epistulae et carmina*, ed. by Christian Lütjohann (1887), pp. 147–72 (liber 2, no. 10, pp. 33–35)). なお本稿ではことわりのない限り、司教在位年は *Le diocèse de Lyon*, ed. by Jacques Gadille, *Histoire des diocèses de France*, 16 (Paris: Beauchesne, 1983), pp. 315–17 に従う。

8 *Sidoine Apollinaire*, II: *Correspondance*, liber 2, no. 10, p. 70, lines 22–24: 'Hinc agger sonat, hinc Arar resultat, | hinc sese pedes atque eques reflectit | stridentum et moderator essedorum'.

ている。さらには、この司教座聖堂が後にサン＝ジャン＝バティストと呼ばれる聖堂であるとの想定も有力である⁹。しかし描写に合致する場所はリヨン旧市街のかなり広い地域に該当し、5世紀の司教座が現在とは違う場所、違う聖堂に置かれていた可能性もある¹⁰。したがって、これだけでは聖堂がサン＝ジャン＝バティスト司教座聖堂に直接つながる存在であったと確定することはできない。確定には文字史料以外の情報が必要になる。なおパティエントゥス時代に司教座聖堂が洗礼者ヨハネに捧げられていたかを、確認する手立てはない。しかし洗礼者ヨハネに対する崇敬は4世紀以降に広範囲に広がっており、この聖人に捧げられた司教座聖堂は5世紀にある程度の数で存在した¹¹。したがって、リヨン司教座聖堂が5世紀の時点で、洗礼者ヨハネを守護聖人としていただいていた可能性はある。

シドニウスの詩には、聖堂の方向を示唆する部分がある。「気高き建物は、左にも右にも傾かず、fronsの頂点に春分時の日の出が見える」¹²。ここで言及される‘frons’は、直訳すると額あるいは正面となり、妻壁あるいはファサードと解釈されている¹³。いずれにせよ、春分時の日の出を建物の西側から見て建物の妻側の頂点方向に太陽が現れることから、平側は東西方向に据えられていることになる。この点について研究者の間で異論はないが、聖堂が東向きに建てられたのか、つまり東側奥に内陣が設置されたのか、あるいは西向きに建てられたのかについて、判断は留保されている¹⁴。聖堂が東向きに建てられたというのが描写の意図するところであるとしても、それが事実であったとは限らない。東向きという描写は、シドニウスが理解していた方位の象徴性の反映であるだけかも知れない。また現在の司教座聖堂も真東を向いているわけではなく、シドニウス時代の聖堂の実際の方向軸を確定するには、考古資料の助けが必要となる。

聖堂の外観について、シドニウスは次のように述べている。「これ〔聖堂〕には、三重の柱廊が連結されており、アキテーヌ〔産大理石〕の柱によって絢爛である。それを模した第2の柱廊が、やや離れたところにあるアトリウムを閉じている。そして柱でできた石造の森が、遠くまで

9 André Pelletier, ‘Le christianisme aux IV^e-V^e siècles: Les églises, la vie religieuse’, in *Histoire de Lyon, des origines à nos jours*, 2 vols (Le Coteau: Horvath, 1990), I: *Antiquité et Moyen Age*, ed. by André Pelletier and Jacques Rossiaud, pp. 251–54 (p. 252); Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 44; Erlande-Brandenburg, pp. 63–65; Février and others, p. 24.

10 Jean-François Reynaud, ‘Les temps barbares’, in *Histoire de Lyon*, I, ed. by Pelletier and Rossiaud, pp. 263–79 (pp. 269–70).

11 Eugen Ewig, ‘Die Kathedralpatrozinien im römischen und im fränkischen Gallien’, *Historisches Jahrbuch*, 79 (1960), 1–61 (pp. 16–19); Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 190.

12 *Sidoine Apollinaire*, II: *Correspondance*, liber 2, no. 10, p. 70, lines 5–7: ‘Aedis celsa nitet nec in sinistrum | aut dextrum trahitur, sed arce frontis | ortum prospicit aequinoctialem.’

13 妻壁: Février and others, p. 24; Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 44; ファサード: *Sidoine Apollinaire*, II: *Correspondance*, liber 2, no. 10, p. 70, left page.

14 Février and others, p. 24; Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 45.

設えられた中間の広間を包んでいる」¹⁵。すなわち聖堂が東向きに建てられていたと仮定すると、3つの開口部をもつ柱廊が東西に1基ずつ設置されていた。そのうち第1柱廊はおそらくアプスのすぐ外側に設置され、ソーヌ川に面していた。第2柱廊は入口側に設置され、フルヴィエールの丘の方向を向いていた。ただし第2柱廊と聖堂の間にはアトリウムがあり、アトリウムの北側と南側にも柱が建てられていたことになる。こうした叙述もシドニウスが理想化したものであったかも知れないが、アプスの外側に位置する第1柱廊は独特である。実際に第1柱廊が存在したとしても、その機能は不明である¹⁶。

シドニウスの詩は、聖堂内部の叙述で最高潮を迎える。「内部では光が輝き、太陽光線が金箔張の格天井まで誘われている。まるで黄褐色の金属のなかで、同色のものが揺れているかのように。さまざまな色の光沢によって際立つ大理石が、ヴォールト、床、窓を駆けめぐる。そのさまざまな色に見える形象の真下では、若草を模した浮き彫りがまるで出るように、緑のガラスに沿って、サファイアに向かっている」¹⁷。このシドニウスの潤色に満ちた描写が、5世紀の聖堂の忠実な再現であるとは考え難い。シドニウスが理想とするローマ時代の絢爛豪華な聖堂を、ここに投影しているとみなす方が自然である¹⁸。ただしシドニウスが司教座聖堂以外の聖堂に対して、ここまでの賞賛を与えることはないであろう。その意味でも、この聖堂が当時の司教座聖堂であることは確実である。

シドニウス・アポリナリスはその後、471年12月あるいは翌年1月にリヨン司教パティエンテトゥスに宛てた書簡で、次のように述べている。「あなたが完全なる献身をもって、あなたに委ねられた聖堂を美化していることを、私は言わないでおく。より立派な新しい建物が立ち上がるか、古い建物が修復されるかを、観衆が吟味できるように」¹⁹。この聖堂は、数年前のヘスペリウス宛書簡で言及された聖堂と同一であり、司教座聖堂を意味するのであろうか。確かに両書簡で言及されている聖堂は、建設中であるという点で共通している。また「あなたに委ねられた聖堂」と

15 *Sidoine Apollinaire*, II: *Correspondance*, liber 2, no. 10, p. 70, lines 16–21: ‘Huic est porticus applicata triplex | fulmentis Aquitanicis superba, | ad cuius specimen remotiora | claudunt atria porticus secundae, | et campum medium procul locatas | uestit saxea silua per columnas.’

16 Erlande-Brandenburg, pp.63–65; Février and others, p. 24; Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 45.

17 *Sidoine Apollinaire*, II: *Correspondance*, liber 2, no. 10, p. 70, lines 8–15: ‘Intus lux micat atque bratteatum | sol sic sollicitatur ad lacunar, | fuluo ut concolor erret in metallo. | Distinctum uario nitore marmor | percurrit cameram solum fenestras, | ac sub uersicoloribus figuris | uernans herbida crusta sapphiratos | flectit per prasinum uitrum lapillos.’

18 Erlande-Brandenburg, p.64.

19 *Sidoine Apollinaire*, III: *Correspondance*, livres VI–IX, 2nd edn (2003), liber 6, no. 12, pp. 26–29 (p. 27): ‘Omitto tanto te cultu ecclesiam tibi creditam conuenustare, ut dubitet inspector, meliusne noua opera consurgant an uetusta reparentur’. この書簡には MGH 版もある (Sidonius Apollinaris, *Epistulae*, liber 6, no. 12, pp. 101–02)。

は、司教座聖堂を意味すると考えるのが自然であるだろう。しかし当時のリヨン市内に再建中の聖堂が複数存在し、いずれもパティエントゥスの管理下にあったという可能性も、少ないながら排除できない。仮にシドニウスが2つの書簡で言及した聖堂が同一のものとする、パティエントゥスによる司教座聖堂の工事はリヨンで最初の聖堂建設ではなく、先行してより古い聖堂が存在したことになる²⁰。

リヨンの聖堂はその後、トゥールのグレゴリウス『証聖者の栄光の書』（587～588年執筆）のなかで言及される。すなわち、ローマ皇帝が自分の娘を助けてくれたリヨンの大助祭に感謝し、大助祭の死に際してリヨンの聖堂に豪華な聖器具を下賜した故事が披露されている。そしてグレゴリウス自身「私は実際にしばしばリヨンの聖堂において、これらの素晴らしい品々〔純金と宝石でつくられた聖遺物箱、聖体皿、および聖杯〕を見た」と報告している²¹。このような宝物が収められているのは、司教座聖堂と考えるのが自然であろう。またグレゴリウスは『師父の生涯の書』（580年代～592年ころに執筆）のなかで、自分の大叔父にあたるリヨン司教ニケティウス（在位553～573年）の伝記を含めている²²。その伝記のなかで、悪魔に憑かれている助祭を祓魔する場面がある。この事件は、朝課をおこなうために「聖ニケティウスが至聖所に入って座ろうとした」ところで生じた²³。「それ〔悪魔〕はすなわち、聖堂のなかであえて歌おうとした。その声は民衆には聞こえなかったが、聖なるお方〔ニケティウス〕は聞き届けた。彼は助祭ではなくそれ〔悪魔〕を、口を極めてののしった」²⁴。これは、司教が聖務を執りおこない、司教座を備えている聖堂の描写であることは間違いないと思われる。その後グレゴリウスは『歴史十巻』でも、ニ

20 Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 45.

21 Gregorius episcopus Turonensis, *Liber in gloria confessorum*, in *MGH SS rer. Merov.*, 7 vols (Hanover: Hahn, 1884–1951), I: [*Gregorii Turonensis Opera*], II: *Miracula et opera minora*, ed. by Bruno Krusch (1885; repr. 1969), pp. 294–370 (c. 62, p. 335): ‘Ego vero has species [caspam, patinam et calicem ex auro puro pretiosisque lapidibus] in ecclesia Lugdunensi saepissime vidi.’ 『証聖者の栄光の書』の作成年代については、Raymond Van Dam, ‘Introduction’, in *Glory of the Confessors*, by Gregory of Tours, trans. by Raymond Van Dam, Translated Text for Historians, 5, repr. with corrections (Liverpool: Liverpool University Press, 2004; repr. 2011), pp. ix–xxi (p. xii) に従った。

22 Bernard de Vréville, ‘Les évêques de Lyon du IV^e au VIII^e siècle’, in *Le diocèse de Lyon*, ed. by Gadille, pp. 19–29 (p. 26). ニケティウスはグレゴリオウスの叔父とも想定されている (Reynaud, ‘Les temps barbares’, p. 267)。

23 Gregorius episcopus Turonensis, *Liber vitae patrum*, in *MGH SS rer. Merov.*, I, II, 211–94 (no. 8, c. 4, p. 244): ‘sanctus Nicetius [...] ingressus est in sacrarium, ubi dum resederet.’ 『師父の生涯の書』の作成年代については、Edward James, ‘Introduction’, in *Life of the Fathers*, by Gregory of Tours, trans. by Edward James, Translated Text for Historians, 1 (Liverpool: Liverpool University Press, 1985; repr. 1986), pp. 1–17 (p. 4) に従った。

24 Gregorius Turonensis, *Liber vitae patrum*, no. 8, c. 4, p. 244: ‘Ipse enim praesumpserat in ecclesia canere, cuius vocem, ignorantibus populis, sanctus agnovit et ipsum verbis acerrimis non diac. exsecravit.’

ケティウスの事績の1つとして「聖堂を建てた」ことに言及している²⁵。これが司教座聖堂を意味するとすれば、ニケティウス時代にも再建がおこなわれたことになるが、別の聖堂の創建であるのかも知れない。この時期になると、リヨン市内で司教座聖堂以外の聖堂の存在が、文字史料で複数確認できるからである²⁶。

リヨンの聖堂に関する7および8世紀の証言は残っていない。ようやく809年から812年の間に大司教レイドラドゥス（在位798～816年）がシャルルマーニュに宛てた報告のなかで、聖堂が言及される。「また諸聖堂の再建について、私は躊躇せずに力の限りを尽くした。この都市最大の洗礼者聖ヨハネに捧げられた聖堂に、新しいものをまともせ、壁を立てることもしたように」²⁷。リヨン最大として言及されているこの聖堂は、司教座聖堂を意味することは間違いないだろう。そして現存する文字史料のなかで、司教座聖堂の名称について最古の言及となる²⁸。またレイドラドゥスのことばを信じれば、パティエントゥス以来の大改修が、カロリング時代におこなわれたことになる。

レイドラドゥスの事績は、次世代に以下のように記憶されている。ヴィエンヌ大司教アドが9世紀後半に編纂した殉教録によれば、レイドラドゥスは皇帝に懇願し、聖キプリアヌス、聖スペラトゥス、聖パンテレイモンの聖遺物をリヨンにもらい受け、それらは「洗礼者聖ヨハネと殉教者聖ステファノの大聖堂に」移葬されたとある²⁹。この文を素直に解釈すれば、司教座聖堂が2聖人に捧げられていたということになる。これについては、司教座にはもともとヨハネとステファ

25 Gregorius episcopus Turonensis, *MGH SS rer. Merov.*, 1.1: *Libri historiarum X*, ed. by Bruno Krusch and Wilhelm Levison (1937–51), liber 4, c. 36, p. 168: ‘ecclesias erigere’. グレゴリウスがこの章で自著の『師父の生涯の書』について言及していることから、この章を『師父の生涯の書』以降に執筆したことになる (Gregorius Turonensis, *Libri historiarum X*, liber 4, c. 36, p. 168, note 6)。

26 Février and others, pp. 27–33.

27 Leidrade, *Le rapport*, in *Recherches sur l'histoire de Lyon du V^{me} siècle au IX^{me} siècle (450–800)*, by Alfred Coville (Paris: Picard, 1928), pp. 283–87 (p. 285): ‘De restauracione eciam ecclesiarum, in quantum valui, noc cessavi, ita ut ejusdem civitatis maximam ecclesiam que est in honorem sancti Johannis Baptiste a novo operuerim et macerias ex parte erexerim.’ この報告にはMGH版もある (Leidradus Lugdunensis archiepiscopus, *Epistolae*, in *MGH Epp.* (1887–), iv: *Epistolae Karolini aevi*, II, ed. by Ernst Dümmler (Berlin: Weidmann, 1895), pp. 539–46 (no. 30, pp. 542–44))。なお書簡の年代比定については、Coville, pp. 293–96; Février and others, p. 19に従った。

28 Jean-François Reynaud, ‘Lyon à l’époque d’Agobard (816–840)’, in *Lyon dans l’Europe carolingienne: Autour d’Agobard (816–840)*, ed. by François Bougard, Alexis Charansonnet, and Marie-Céline Isaïa, Collection Haut Moyen Âge, 36 (Turnhout: Brepols, 2019), pp. 7–33 (p. 20); Reynaud, ‘Les temps barbares’, p. 270; Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 45; Février and others, p. 26.

29 *Le martyrologe d’Adon, ses deux familles, ses trois recensions: Texte et commentaire*, ed. by Jacques Dubois and Geneviève Renaud, Sources d’histoire médiévale (Paris: Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique, 1984), 14 September, p. 313: ‘in maiori ecclesia beati Iohannis Baptistae ac sancti martyris Stephani’.

ノという2人の守護聖人がおり、のちに別々の聖堂の守護聖人に分化したという仮説も唱えられている³⁰。しかし後述するようにレイドラドゥスの時代に、司教座聖堂とは別個に、ステファノに捧げられた聖堂がすでに存在していた。したがって、アドの殉教録の記事は「洗礼者聖ヨハネの大聖堂と殉教者聖ステファノの〔聖堂〕に」と、補って解釈するのが実情に適合するように思われ、この解釈を支持する研究者もいる³¹。もっともこの解釈を採用する場合、聖キプリアヌス、聖スペラトゥス、聖パンテレイモンの聖遺物をどのように配分したのか、という別の問題を惹起する。いずれにせよ、解釈に困難をとまなう記事である。アドの殉教録の記事が司教座聖堂のみに関係していると仮定すると、レイドラドゥスはこの聖堂を改修する際、その拡大した規模に見合うだけの聖遺物を収集したものと思われる。

また同じ時代、リヨン助祭のフロルスは、ある聖堂の内陣を描写した詩を残している。「聖なる徴により崇高なる洗礼者ヨハネ。祭壇に栄誉を与う」³²。司教座聖堂の主祭壇は、洗礼者聖ヨハネに捧げられていたであろう。この詩が司教座聖堂の内陣をたたえたものである可能性は高い。しかし、洗礼者ヨハネは洗礼堂の守護聖人である場合もしばしば見られ、フロルスが別の聖堂を描写している可能性も排除できない³³。ここでフロルスが司教座聖堂の祭壇を描写していたとすると、ほかにも注目すべき記述がある。フロルスは祭壇の下に殉教者たちの聖遺物が安置されていたことを示唆しているが、前述の聖キプリアヌス、聖スペラトゥス、聖パンテレイモンの聖遺物がこれにあたると考えている研究者もいる³⁴。また祭壇の上方には、王者キリストを中心とした図像が飾られていたことも、フロルスは示唆している³⁵。

なお司教座聖堂の位置と名称が同時に判明するのは、16世紀中期を待たなければならない。1550年ころに作製された『リヨン配景地図』に、現在と同じ場所に大聖堂が描かれ、そこに「サン＝ジャン」の文字が添えられている³⁶。

30 Reynaud, *Lugdunum christianum*, pp. 190–91.

31 'in maiori ecclesia beati Iohannis Baptistae ac [ecclesia] sancti martyris Stephani'. Février and others, p. 26.

32 Florus Lugdunensis, *Carmina*, in *MGH Poetae* (1881–), II: *Poetae latini aevi Carolini*, II, ed. by Ernst Dümmler (Berlin: Weidmann, 1884), pp. 507–66 (no. 20, p. 548, lines 9–10): 'Pignoribus sacris clarus baptista Iohannes | Altare inlustrat'.

33 Ewig, p. 16.

34 Reynaud, 'Lyon à l'époque d'Agobard', p. 20.

35 Florus Lugdunensis, *Carmina*, no. 20, p. 548, lines 1–2.

36 Archives municipales de Lyon, *Plan scénographique de Lyon vers 1550* < <https://recherches.archives-lyon.fr/ark:/18811/vnqlfj7pk50t> > [accessed 4 January 2023]: 'S·IEHAN'. なお『リヨン配景地図』より前に作製されたと考えられる16世紀前半のデッサンに司教座聖堂が描かれているが、聖堂名への言及はない (Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 47)。

第2章 サン＝テティエンヌ聖堂

司教座聖堂建物群のなかで司教座聖堂に次いで古い言及が、サン＝テティエンヌ（聖ステファノ）聖堂である。第1章で述べたように、大司教レイドラドゥスは809年から812年の間に、シャルルマーニュに宛てて「諸聖堂の再建について」報告している。その報告書で司教座聖堂に引き続き、「同様にサン＝テティエンヌ聖堂の屋根を、私は新たに葺き替えた」と記している³⁷。この聖堂は、1796年に破壊されるまで司教座聖堂の北に隣接していた同名の聖堂であることは、研究者の間で見解の一致を見ている³⁸。レイドラドゥスの報告によれば、この聖堂は修復を要するほど古くなっていくことになる。ガリアの聖堂が筆頭殉教者聖ステファノに捧げられたのは、5世紀までさかのぼることができる³⁹。そこでリヨンでも、5世紀にサン＝テティエンヌと呼ばれる聖堂が存在した可能性がある。

前述のレイドラドゥス報告とともに伝来している、リヨン教会の財産リスト（809–812年）がある。そこには「聖ステファノの館に、聖堂参事会の聖職者が52名いる。彼らは83の農民保有地と50の領主直営地を、ベネフィキウムとして所有している」という記事がある⁴⁰。727の農民保有地、33の領主直営地を所有していたとされるレイドラドゥスと比較すると、農民保有地の数ではかなり下回るものの、領主直営地の数は上回っており、サン＝テティエンヌ聖堂に属する人びとは相当程度の経済的基盤を有していたことが推測される。またライヒャナウ修道院の『祈禱兄弟盟約者名簿』（823年～825年ころに作成）によれば、「筆頭殉教者聖ステファノの館の聖堂参事会員の名前」として150名以上が挙げられている⁴¹。ライヒャナウと記念祈禱の盟約を結んだ聖ステファノの館は、リヨンのサン＝テティエンヌ聖堂に同定されている⁴²。したがってサン＝テティエン

37 Leidrade, *Le rapport*, p. 285: 'Similiter ecclesie Sancti Stephani tegumentum de novo reparavi.'

38 Février and others, p. 26; Reynaud, 'Les temps barbares', p. 270; Reynaud, 'Lyon à l'époque d'Agobard', p. 20.

39 Ewig, pp. 40–46.

40 *Fragment de bref de l'Eglise de Lyon*, in Coville, pp. 287–88: 'Sunt in domo Sancti Stephani canonici clerici numero LII; habent in beneficio colonicas vestitas LXXXIII. absas L.'

41 *Das Verbrüderungsbuch der Abtei Reichenau*, ed. by Johanne Autenrieth, Dieter Geuenich, and Karl Schmid, MGH Libri mem. N. S., 1 (Hanover: Hahn, 1979), faksimile, p. 94: 'NOMINA KANONICORUM DOMUS SANCTI STEPHANI PROTO MARTYRIS'. 写本の半葉を占めており、盟約を結んでいるリヨン司教区内のほかの教会・修道院と比較しても、多くの人数が記録されている。名簿には生存者と物故者がともに記載および追記されていると思われ、サン＝テティエンヌ聖堂参事会員のいる時期の人数を算出することは難しい。しかし欄外・列外への記載を除いた約70人が、当時の会員数と見なされている (Michel Rubellin, 'Lyon à l'époque carolingienne', in *Histoire de Lyon*, 1, ed. by Pelletier and Rossiaud, pp. 281–94 (p. 289); Coville, p. 478, note 2)。なお名簿作成年代については、甚野尚志「ライヒャナウ修道院の『祈念書』—カロリング王権と祈禱兄弟契約—」渡辺節夫編『ヨーロッパ中世の権力編成と展開』（東京大学出版会、2003年）所収、7–40頁に従った。

42 *Confraternitates Augienses*, in *MGH Necr.*, 6 vols (Berlin: Weidmann, 1866–1920), [Supplementband], *Libri confraternitatum Sancti Galli, Augienses, Fabariensis*, ed. by Paul Piper (1884), pp. 145–352 (p.

ヌ聖堂に集う人びとは、遠隔地の修道院と盟約を結べるほどに精神的に自立した団体であったことが推定できる。これら2点のリストから、サン＝テティエンヌの聖職者集団は、9世紀前半の時点で経済的・精神的に相当の地位を築いていたことが分かる。

9世紀後半になると、第1章でも言及したように、アドの殉教録がサン＝テティエンヌ聖堂に言及している可能性がある。また同時期にリヨン助祭フロルスは「聖ステファノ祭壇に捧げる小文—もっとも聖なる、そしてもっとも栄えある、われら弟子たちの父である筆頭殉教者ステファノに捧ぐ—」と題した詩を残している⁴³。フロルスがこの詩を捧げた祭壇は、サン＝テティエンヌ聖堂にあったと考えられている⁴⁴。

サン＝テティエンヌ聖堂は、いかなる機能を有していたのか。前述のリヨン教会の財産リストおよびライヒェナウ修道院の『祈禱兄弟盟約者名簿』は、この聖堂が司教座聖堂参事会に供されていたことを示唆している。しかし時代がくだって12世紀に作成されたりヨン司教リスト（13世紀前半に筆写）のなかで、司教アルピヌス（在位4世紀末？）の脇に「サン＝テティエンヌ聖堂にして洗礼堂」と書かれている⁴⁵。この司教の最大の事績が、同聖堂の創建であったことを意味するのであろう。洗礼は当初は浸礼によったため、古代末期や初期中世には洗礼堂が必要であった。したがって司教座聖堂にはかなり早い時期から、洗礼堂が付属していた。しかしカロリング時代から11世紀にかけて、洗礼は滴礼・灌礼に代わったため特別な施設は必要とされず、北イタリアを除いて洗礼堂は廃棄ないし別の用途に転用された⁴⁶。したがって12ないし13世紀のサン＝テティエンヌ聖堂が洗礼堂であった可能性はきわめて低く、われわれを当惑させている。1つの解釈として、次のような想定が成り立つかもしれない。アルピヌスが司教であった時代にサン＝テティエンヌが洗礼堂として創建され、のちに司教座聖堂参事会の聖堂に転用されたが、元来は洗礼堂であったという記憶が後代まで継承されていた⁴⁷。このように考えると合理的にも考えられるが、サン＝テティエンヌが洗礼堂であったという記述は文字史料ではこれが最古であり、史

257, note); *Das Verbrüderungsbuch der Abtei Reichenau*, p. 226; Rubellin, p. 289.

43 Florus Lugdunensis, *Carmina*, no. 12, p. 542; 'TITULUS LIBELLI AD ALTARE SANTI STEPHANI OBLATI. | SANCTISSIMO ET GLORIOSISSIMO ALUMNO AC PATRONO NOSTRO BEATO STEPHANO PROTOMARTYRI DEDICATUS.'

44 Février and others, p. 26.

45 *Nomina pontificum sancte dei ecclesie Lugdunensis ab initio*, in *Obituaire de l'Église primatiale de Lyon: Texte du manuscrit de la Bibliothèque de l'Université de Bologne, XIII^e siècle*, ed. by Marie-Claude Guigue and Georges Guigue (Lyon: Vitte, 1902), pp. 111–12 (p. 111): 'ecclesiam et baptisterium Sancti Stephani.' 年代比定については、Février and others, p. 20に従った。

46 本間紀子「洗礼堂」上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』第3巻（研究社、2002年）所収、869頁；Esquieu, pp. 16–21; Erlande-Brandenburg, pp. 66–72, 94–95.

47 Bernard de Vréville, 'La vie de l'Église de Lyon du IV^e au VIII^e siècle', in *Le diocèse de Lyon*, ed. by Gadille, pp. 30–49 (p. 34); Février and others, p. 26; Reynaud, 'Les temps barbares', p. 270; Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 46.

料の沈黙をどのように説明できるだろうか。

そしてサン＝テティエヌ聖堂の位置と名称が同時に判明するのは、16世紀中期を待たなければならぬ。『リヨン配景地図』に、大聖堂のすぐ北側にアプスを持つ建物が描きこまれ、そこに「サン＝テティエヌ」の文字が添えられている⁴⁸。

第3章 サント＝クロワ聖堂

1796年に破壊されるまで、サン＝テティエヌ聖堂の北に隣接していたのが、サント＝クロワ（聖十字架）聖堂である。聖十字架崇敬の高揚開始は、ガリアではかなり遅く7世紀のことであり、この聖遺物の名を帯びる聖堂もこのころに出現する⁴⁹。リヨンでは、大司教レイドラドゥスによる「諸聖堂の再建について」の報告（9世紀）でも、サント＝クロワ聖堂は言及されない。

文字によって伝来している最古の証拠は、厳密に言えば12ないし13世紀に属する。前述の司教リスト（12世紀作成、13世紀前半筆写）に、司教アレギウス（在位602／603～614年）の事績として「サント＝クロワ聖堂とサン＝ジュスト修道院を」創建したことが挙げられている⁵⁰。また『リヨン司教座教会過去帳』の13世紀の写本には、サント＝クロワ聖堂に寄与した人物が記載されている。そのなかでもっとも古い時代に属するのが、この聖堂に壺を遺贈したアダルガルディスである。彼女は首席司祭ドゥランドゥスの母と記されており、ドゥランドゥス自身は1030年ころにその地位にあった人物である⁵¹。サント＝クロワ聖堂への貢献者として、12ないし13世紀の人物は珍しくない⁵²。なかでも注目すべきは、大司祭にしてサント＝クロワ聖堂の長であるギルベルトゥスの事績で、彼は「さらにサント＝クロワ聖堂に、華麗な内階段を持つ西門を設置した」とされる。ギルベルトゥスは別の文書で、1145年から1147年の活動が知られている人物である⁵³。『リヨン司教座教会過去帳』以外では、1224年の教会会議決議が残っている。そこでは、リヨン司教座聖堂で開催される主日ミサで福音書を読む資格を、司教座聖堂参事会員に限定することが定められているが、サント＝クロワ聖堂の長であっても例外がないことが念押しされている⁵⁴。サント

48 'S・ESTIENNE'. 『リヨン配景地図』については、註36を参照せよ。

49 多田、前掲書、199-200頁。より早い時期の崇敬高揚を想定する研究者もいるが、後代に成立した文書に依拠している（Ewig, pp. 3-6; Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 191）。

50 *Nomina pontificum Lugdunensis*, p. 111: 'ecclesiam de Sancta Cruce et monasterium Sancti Justi.'

51 *Obituaires de la Province de Lyon*, Recueil des historiens de la France: Obituaires, 5-6, 2 vols (Paris: Imprimerie Nationale, 1933-65), 1: *Diocèse de Lyon, première partie*, ed. by Georges Guigue and Jacques Laurent (1933), 29 November, p. 133.

52 Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 46.

53 *Obituaires de la Province de Lyon*, 1, 24 January, p. 56: 'Portas etiam occidentales in ecclesia Sancte Crucis cum gradibus interioribus sumptuose edificavit'.

54 *Cartulaire lyonnais: Documents inédits pour servir à l'histoire des anciennes provinces de Lyonnais*,

=クロワの参事会長がとくに言及されているのは、この聖堂がリヨン教会のなかで特別視されていたことの裏返しであろう。このように見ていくと、サント=クロワ聖堂は12ないし13世紀に存在し、経済的・精神的に有力であったことは確実である。しかし文字史料のみによって、それ以前の歴史をたどることはむずかしい。

なおサント=クロワ聖堂の位置と名称が同時に判明するのは、ほかの2聖堂と同様に16世紀中期である。『リヨン配景地図』において、サン=テティエンヌ聖堂のすぐ北側にアプスと思われる部分を持つ建物が描きこまれ、そこに「サント=クロワ」の文字が添えられている⁵⁵。

リヨン司教座聖堂区画に存在したサン=ジャン=バティスト聖堂、サン=テティエンヌ聖堂、サント=クロワ聖堂の関係は、いかなるものか。司教座聖堂区画の生成期には、2棟の聖堂と1棟の洗礼堂が、司教座聖堂建物群を形成することが多かった。これは学術上、二重司教座聖堂と呼ばれている。5世紀には、2棟の司教座聖堂のうち1棟が旧約聖書の、もう1棟が新約聖書の象徴であり、それらを洗礼堂が統合していると考えられていた。実際の用途としては、一方が洗礼志願者用の聖堂、他方が洗礼を受けた信徒用の聖堂であった。ただし北イタリアでは、北の聖堂が夏用、南の聖堂が冬用に使用されることもあった。リヨンの場合、サン=ジャン聖堂とサント=クロワ聖堂が司教座聖堂であり、その間に位置するサン=テティエンヌ聖堂が洗礼堂として機能しており、二重司教座聖堂の典型例としてしばしば見なされている⁵⁶。しかしながらこの想定を、文字史料のみから確認することはできない。少なくとも、サン=テティエンヌ聖堂が洗礼堂として4世紀に創建され、サン=ジャン聖堂とサント=クロワ聖堂の存在が、それと同時期までにさかのぼることを、別の方法で証明する必要がある。

第4章 生活空間

司教座聖堂建物群は、聖堂のみから構成されているわけではない。聖堂に勤務する人びとには、生活空間が必要となる。まず司教や聖職者の生活空間として、司教座聖堂区画には司教館がもうけられた。通常は司教座聖堂との往来が容易であるように、司教館はそれと近接して建てられた。その後8世紀以降、聖職者の生活空間が司教館とは別に設置されることになった。他方で司教館は、司教が世俗領主として経済力を蓄えるにつれ巨大に豪華になり、10世紀以降に司教宮殿と呼ばれることになる⁵⁷。

Forez, Beaujolais, Dombes, Bresse & Bugey comprises jadis dans le pagus major Lugdunensis, ed. by Marie-Claude Guigue, Collection de documents inédits pour servir à l'histoire du lyonnais, 2 vols (Lyon: Plan, 1885-93), 1: *Documents antérieurs à l'année 1255* (1885), no. 204, pp. 265-66.

55 'S・CROIX'. 『リヨン配景地図』については、註36を参照せよ。

56 Hubert, pp. 545-46; Erlande-Brandenburg, pp. 57-66; Esquieu, pp. 16-18.

57 Erlande-Brandenburg, pp. 72-75, 92-93, 146-55; Esquieu, pp. 100-15.

リヨンにおける司教の生活空間に関する最古の記述は、6世紀後半に属する。『聖ニケティウス伝』（580/590年代に執筆）には、「聖ニケティウスが教会館に肉体として出現した」と記述されている⁵⁸。これはリヨンを大火から守るため、またある姉妹の視力を回復させるために、ニケティウスが死後の奇跡をおこなった話のなかで出現する。その後トゥールのグレゴリウス『歴史十巻』は、ニケティウスの後継者であるプリスクス（在位573年～585年以降）の時代について言及している。プリスクスが「司教職についたころ、彼の教会館の建物を高くするように命じた」⁵⁹。この改修は、階を建て増したものと考えられている⁶⁰。しかしその後、悪行のためにニケティウスに破門されたある助祭が、聖人の死後に「彼の館の屋根のうえに」登って屋根を足げにできることを喜んだが、足下の梁が外れて落下して命を落としたというエピソードも語られており、館が損傷したことを伝えている⁶¹。グレゴリウスはニケティウスを称揚する一方で、プリスクスへの評価は低い。プリスクスはこれまでの「教会館に女性が入ったことがない」という慣例を破り、妻のスサンナを同居させたとして、非難されている。そして「司教館において友人」である前述とは別の助祭が、司教への忠告を怠ったとして夢のなかでニケティウスに罰せられた⁶²。これらのことから、司教の生活空間は教会館または司教館と称されていたことが分かる。またそこには司教のみならず、配下の聖職者も共住していたこともうかがえる。もっとも2点の文書のみから、6世紀の司教・聖職者の生活空間について、断定的な結論を下すことは控えるべきであろう。

リヨン司教の生活空間について、7および8世紀の文書は沈黙している。しかし大司教レイドラドゥスがシャルルマーニュに宛てた報告（809-812年）のなかで、司教館についての言及が見られる。「聖堂の再建のほか、私はそのうえ司教館を2棟にした。そのうち1つはほとんど壊れていたので、私は修繕というより再建をした。また私は、テラス付きの別館を新たに建てた」⁶³。別

58 *Vita Nicetii episcopi Lugdunensis*, in *MGH SS rer. Merov.*, III: *Passiones vitaeque sanctorum aevi Merovingici et antiquiorum aliquot*, [I], ed. by Bruno Krusch (1896), pp. 518-24 (c. 9, p. 523): 'sanctum Nicetium in ecclesiae domum corporaliter advenisse'. 著者不明であるが、ニケティウスの後継司教の1人であるアエテリウス（在位589年以前～602年）の依頼によって執筆され、またトゥールのグレゴリウスが『師父の生涯の書』（580年代～592年ころに執筆。註23参照）でこの伝記に言及していることから、580年代または590年代の間に編纂されたと考えられる（*Vita Nicetii*, c. 17, p. 524; Gregorius Turonensis, *Liber vitae patrum*, no. 8, preface, p. 241）。

59 Gregorius Turonensis, *Libri historiarum X*, liber 4, c. 36, p. 169: 'Iusserat enim in primordio episcopatus sui aedificium domus ecclesiasticae exaltari'.

60 Gregory of Tours, *The History of the Franks*, trans. by Lewis Thorpe, Penguin Classics (London: Penguin Books, 1974), p. 232.

61 Gregorius Turonensis, *Libri historiarum X*, liber 4, c. 36, p. 169: 'super tectum domus illius'.

62 Gregorius Turonensis, *Libri historiarum X*, liber 4, c. 36, p. 168: 'mulier domum non ingrederetur ecclesiae'; liber 4, c. 36, p. 169: 'amicus in domo episcopi'.

63 Leidrade, *Le rapport*, p. 285: 'Preter monasteriorum reparaciones, domus quoque episcopales inter quas unam restauravi que jam pene destructa erat, quam operui. Aliam quoque domum cum solarario de novo aedificavi et duplicavi'.

館にあるテラス付きの部屋は、大司教の饗応ないし引見用の部屋と考えられている⁶⁴。この解釈が正しいとすると、カロリング時代にリヨンの司教館は大きな性格的変貌を遂げたことになる。つまり司教館は私的な生活空間であるのみならず、公的な機能を持つようになった。ここに司教館から司教宮殿への発展の端緒を、見ることもできるかも知れない。

リヨンの司教館が初期中世に存在したとしても、その場所は不明である。司教宮殿は中世末期以来、司教座聖堂の南東に隣接して位置しているが、この位置関係を初期中世にまで遡及させることはできない⁶⁵。聖堂とは異なり、中世の人びとは住居を移転させることに躊躇はなかったであろう。小規模の住居であればなおさらである。

レイドラドゥスはまた、聖職者のための生活空間を設置したことを、シャルルマーニュに報告している（809–812年）。「また私は、司教座聖堂参事会員用の禁域を建設した。そこでは今、す



左手前が旧サン＝ジャン司教宮殿、右がサン＝ジャン＝バティスト司教座聖堂。写真右方向が北。2017年筆者撮影。

64 Février and others, p. 26; Erlande-Brandenburg, p. 93.

65 サン＝ジャン司教宮殿は建物としては現存しているが、図書館など学術関係の施設として使用されている。

すべての参事会員が、1つの部屋で生活していることが知られている」⁶⁶。この報告は、カロリング時代に司教座聖堂参事会が誕生した運動の一環と解釈されている⁶⁷。いわゆる『クロデガング戒律』（755年ころ）や『聖堂参事会掟則』（816および817年）において、参事会員が禁域で共住しなければならない旨、規定されている⁶⁸。リヨンにおいてはレイドラドゥスの時代に、司教とその他のほかの聖職者の生活空間が分離し、司教館とは別に参事会館が設置されたものと考えられる。なお前述のように同時期に、サン＝テティエヌ聖堂が司教座聖堂参事会員用の聖堂であることが明確になる。しかしこの聖堂と参事会員の居住空間を結びつける文字資料は伝来していない⁶⁹。

司教座聖堂の南西に、マネカントリーと呼ばれる建物が現存している。これは司教座聖堂区画における現存最古の建築であり、南側はレイドラドゥス時代の遺構を含んでいる。そのためレイドラドゥスが再建した司教館、新築した司教館、あるいは参事会館との関連が推定されているが、文字史料によりこの問題を解決することはできない⁷⁰。

第5章 そのほかの建物

メロヴィング時代およびカロリング時代のリヨンには、慈善施設が存在したようである。549年のオルレアン教会会議では、キルデベルト1世（在位511～558年）と王妃ウルトロゴータが「神の靈感によりリヨン市内に設立した救貧院について」、取り決めがなされている⁷¹。救貧院は自立的な組織であるため、その資産がリヨン司教やリヨン教会の管理下に移管されることが禁じられた。この条項を含む教会会議決議は参加者により承認されているが、その筆頭署名者がリヨン司教サケルドス（在位549年以前～552年）であった。その後809年から812年の間に作成されたりヨ

66 Leidrade, *Le rapport*, p. 285: 'Clastrum quoque clericorum construxi, in quo nunc omnes sub uno conclavi manere noscuntur.' *Clastra* は、立ち入りに制限が加えられている居住域と解釈されることが多いが、単なる壁を意味するとの主張もある (Reynaud, 'Lyon à l'époque d'Agobard', p. 20)。

67 Madeleine Vialettes, 'Le bâtiment de la "Vieille Manécanterie" de la cathédrale Saint-Jean de Lyon', *Bulletin monumental*, 153 (1995), 47–63 (p. 47); Erlande-Brandenburg, pp. 82–85; Esquieu, pp. 30–32, 40–41; Rubellin, p. 289.

68 *Regula Sancti Chrodegangi*, in *The Chrodegang Rules: The Rules for the Common Life of the Secular Clergy from the Eighth and Ninth Centuries: Critical Texts with Translations and Commentary*, by Jerome Bertram, Church, Faith and Culture in the Medieval West (Aldershot: Ashgate, 2005), pp. 27–51 (c. 3, pp. 30–31); *Institutio Canoniorum Concilii Aquisgranensis*, in *The Chrodegang Rules*, pp. 96–131 (c. 117, pp. 108–09).

69 Février and others, p. 26.

70 Madeleine Vialettes, 'La manécanterie de la cathédrale Saint-Jean de Lyon', *Cahiers d'histoire*, 41.1 (1996), 25–38; Vialettes, 'Le bâtiment de la "Vieille Manécanterie"', 47–63.

71 *Concilium Aurelianense*, in *MGH Conc.* (Hanover: Hahn, 1893–), I: *Concilia aevi Merovingici [511–695]*, ed. by Friedrich Maassen (1893), pp. 100–12 (c. 15, p. 105): 'De exenodocio [...] in Lugdunensi urbe inspirante Domino condiderunt'.



手前がマネカントリー，奥がサン＝ジャン＝バティスト司教座聖堂。写真右方向が東。2017年筆者撮影。

ン教会の財産リストに、「またサン＝ロマン施療院は、22の農民保有地と10の領主直営地を所有していた」と記録されている⁷²。メロヴィング時代の救貧院の場所は不明であるが、司教座教会の干渉が危惧されていることから、司教座聖堂の近くに存在した可能性がある。カロリング時代の施療院についても場所不明であるが、司教座聖堂区画の南端に近代まで、サン＝ロマン聖堂が存在したことが知られており、同名の施療院の位置を示唆すると考える研究者もいる。ただカロリング時代の施療院は当時の設立であるのか、それ以前から存在したのか、さらにはメロヴィング時代の救貧院を起源とするのかについて、文字史料から判明することは皆無である⁷³。

リヨン司教座聖堂区画に存在した可能性のある建物としては、このほかに学校を挙げることができる。レイドラドゥスからシャルルマーニュへの報告（809-812年）によれば、「一方で私は楽師のための学校を有しており、彼らの多くは、他の者を教えることができるように訓練されている。これに加えて私は読師のための学校を有している。彼らは聖書朗読の仕事のために鍛えられ

72 *Fragment de bref de l'Eglise de Lyon*, in Coville, p. 288: 'Ad hospitale quoque Sancti Romani, habet colonicas vestitas XXII, absas X'.

73 Février and others, pp. 31, 34; Reynaud, *Lugdunum christianum*, p. 192; Reynaud, 'Lyon à l'époque d'Agobard', pp. 23-25.

るだけではなく、聖書の意図の霊的理解という果実を獲得する」⁷⁴。このようにカロリング時代のリヨンには、2種の学校が存在したようだが、その創設時期や場所について、文字史料は沈黙している⁷⁵。

おわりに

シドニウス・アポリナリス、トゥールのグレゴリウス、リヨン大司教レイドラドゥスといった当代を代表する人物の筆によって、リヨン司教座聖堂区画が生成された事情がある程度、明らかになっている。まず5世紀後半の時点で司教座聖堂が存在しており、9世紀前半までに何度かの改築を経験していた。そのほかの建物については6世紀前半に救貧院、後半に司教館の存在が知られるようになる。そして9世紀前半に至り、司教座聖堂参事会員用の聖堂と生活空間、学校、施療院の存在が判明し、司教座聖堂建物がさしあたり整ったと見ることができる。

司教座聖堂区画の生成のプロセスについて、ほかのガリアの司教座都市に比べるとリヨンには相対的に多くの証言がある。しかしながら、不明点が残されていることも事実である。リヨン司教座聖堂区画の出発点は、おそらく司教座聖堂であろうが、この聖堂はいつ建設されたのか。リヨンにおけるキリスト教共同体は、すでに177年にその存在が知られており、司教座聖堂の最初の証言とのあいだに、約300年もの空白がある⁷⁶。サン＝テティエンヌ聖堂についても、いつから存在したのか、また当初の用途は洗礼堂であったのか、という疑問が残る。サント＝クロワ聖堂については、伝承を信じて7世紀の創建の可能性はないのか、あるいはそれ以前にまで歴史を遡らせることはできないのか。司教座聖堂建物のほかの建物についても同様に、その起源についての事情は不詳である。

考古資料はこうした不明点を明らかにするために、どれほどの寄与を期待できるのか。この点については次稿で論ずることにしたい。

74 Leidrade, *Le rapport*, pp. 284–85: ‘Nam habeo scholas cantorum, ex quibus plerique ita sunt eruditi ut eciam alios erudire possint. Preter hec, habeo scholas lectorum, non solum qui officiorum lectionibus exercentur, sed eciam qui in divinorum librorum meditatione spiritalis intelligencie fructus consequuntur.’

75 リヨンの司教座付属学校は、シャルルマーニュによる聖職者教育督促の一例と考えられている (Esquieu, pp. 30–31; Rubellin, pp. 288–89)。

76 Pierre Wuilleumier, *Lyon: Métropole des Gaules*, *Le monde romain* (Paris: Belles Lettres, 1953), pp. 93–97; *Les Martyrs de Lyon (177)*, *Lyon, 20–23 septembre 1977*, ed. by Centre national de la recherche scientifique, *Colloques internationaux du Centre national de la recherche scientifique*, 575 (Paris: Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique, 1978); François Richard and André Pelletier, *Lyon et les origines du christianisme en occident* (Lyon: Éditions Lyonnaises d’Art et d’Histoire, 2011); Février and others, p. 22; Pelletier, *Lugdunum, Lyon*, pp. 116–21.